

木製文具

静岡では古くから、漆塗の硯箱や文庫などの木製文具が作られていました。静岡の木製文具は、一般文具の需要の増加とともに、漆器産業から派生的に発達してきました。

明治 25 年(1892)頃、硯箱は漆器問屋の主要商品でしたが、その後専門の文具商が扱うようになり、定規類、インクの吸取器と品目も増えていきました。

昭和初期が木製文具の発展期で、第二次大戦直後まで盛んに作られていました。その後は、学校教材、文具を中心に生産してきましたが、昭和 30 年(1955)代に入るとプラスチックやスチールなどの新素材が現れ、木製文具の生産量が減少してきました。

現在は、事務用品、学童用教材用品、洋画材、印判材料、雑貨など多彩な製品を送り出しています。

「静岡県輸出雑貨協同組合」と「静岡文具製造組合（現静岡木製クラフト）」は、他の木工産業と同様、産地活性化のために平成 3 年（1991）、有名デザイナーと組んで新商品を開発する、「木製雑貨イメージアップ事業」の発表展示会を行いました。

木製雑貨のために提案したデザイナーは、清水俊彦、浅野克、アンドレ・デイビー、水戸岡鋭治の 4 名。静岡と東京でそれぞれ開催された展示会では、多方面から好評を得ました。

同年、雑貨・挽物・家具共同で「産地振興ダイナミクス事業」が静岡市でスタートしました。

新製品の開発に意欲的な 25 社が結集し、ビル・モグリッジ、青木隆彌、大滝正明の 3 人のデザインの製品化に取り組みました。平成 4 年（1992）3 月、展示会が静岡と東京で開催されました。